

# 三陸漁村の暮らしの風景と再生

Revival of Landscape on the Villages in Sanriku Seaside Area

大隅 一志\*

Kazushi OSUMI

## 1. はじめに

「私を魅する原因は、三陸地方の海が人間の生活と密接な関係を持って存在しているように思えるからである。観光業者の入りこんだ海岸の海は、観光客の目を楽しませることはあっても、すでにその土地の人々とは無縁のものになっている。海は、単なる見世物となっていて、土地の人々の生活の匂いが感じられない。

また都会や工業地帯の海は、ただそこに塩分をふくんだ水がたたえられているというだけにすぎない。……

それらにくらべると、三陸沿岸の海は土地の人々のためにある。海は生活の場であり、人々は海と真剣に向き合っている。」

三陸海岸を幾度も歩いて旅をした作家・吉村昭が『三陸海岸大津波』の一節で語っている三陸の魅力についてである。

氏が旅をした当時と今とは、交通事情も人々の生活スタイルもずいぶん様変わりをしてはいるものの、それでもなお、三陸はまだ都会から遠く、震災前の漁村は、旅人を惹きつけるだけの魅力を十分備えていたように思う。

残念ながら、2011年3月の東日本大震災によって、これらの漁村風景の大半は失われてしまった。これからの三陸は、はたして、再び旅人を魅する漁村風景を取り戻せるのだろうか。筆者が長らく関わってきた岩手県田野畑村の観光と復興への取り組みを紹介しながら、風景としての三陸漁村のこれからを考えてみたい。

## 2. 三陸沿岸漁村の特徴

青森県から宮城県まで南北600kmにも及ぶ三陸海岸は、大きく2つの地形的な特徴をもっている。岩手県宮古市より南は、多くの人に三陸という言葉でイメージされる典型的なリアス式海岸であるのに対し、宮古市以北は、ダイナミックな断崖となった海岸段丘が直線的に続いている。

リアス式海岸の南部沿岸では、豊かな漁場を眼前にして、天然の良港ともいえる入り江

の奥部に釜石、大船渡、気仙沼といった港湾都市や活気のある港町が形成されているのに対し、北部沿岸では、切り立った断崖下のわずかな平地や傾斜地に小さな漁村集落が張り付くように点在しており、人の暮らしの場のたたずまいは地形的特徴を反映して趣を異にしている。

## 3. 田野畑村と「番屋エコツーリズム」

岩手県田野畑村は、三陸北部沿岸漁村の典型的な特徴をもった人口3,800人ほどの小村である。三陸を代表する景勝地「北山崎」や「鶴の巣断崖」などを有する海岸部は迫力に満ち、200mもの標高差のある断崖下には、羅賀、島越などの小さな漁村集落が点在している。

観光は、漁業、畜産と並ぶ村の基幹産業の一つで、これまでは浄土ヶ浜（宮古市）や龍泉洞（岩泉町）とともに三陸の周遊観光ポイントである北山崎の存在が観光を支えてきた。一方で、12年ほど前からは、地域に根差した田野畑村ならではの体験型観光に積極的に取り組むようになった。北山崎へのわずか20分足らずの立ち寄り型観光だけでは、宿泊化や経済消費につながらない上に、旅行者と村民とがふれあう機会もなく、村の魅力にも気づいてもらえないからである。

田野畑村に限らず、今日、体験型観光は全国各地で取り組みが行われている。有力な観光資源がない農山漁村でも、地域の人が関わり、「見る（観る）」だけではわからない地域の魅力を、体験を通して体感してもらうことができ、多少なりとも関わった地域の方の収入にもつながるからである。それは、どこでも可能であるものの、同時に、ただ体験させるだけでは地域の魅力を付加価値に変えることはできない。「その地ならではの」観光体験にするためには、地域の何を伝えたいのか、何を知ってもらいたいのかという地域に対する「光の当て方（光らせ方）」が何よりも重要になる。

この点において、田野畑村が着目したのが漁師の「番屋」である。

当時、村には、漁村や浜に素朴な漁師の作業小屋が各所にあったが、中でも机浜には30

棟ほどの番屋が立ち並んでいた。北海道の「鯨御殿」はもとより、三陸・気仙沼市の「唐桑御殿」などに比べれば、漁師たちが自前で立てた掘立小屋に、建築的な価値はほとんど見出せない。にも関わらず、そこには、大自然に抗うことなく寄り添うように共存してきた三陸北部沿岸漁村のありのままの暮らしが残されており、都会から訪れる旅行者にとっては、何よりも三陸らしさを感じさせてくれる実に味わい深い風景であった（写真-1）。

幸いなことに、「机浜番屋群」は、地域の人たちにもその価値が少しずつ理解されていき、番屋の徹底的な調査や番屋マップの作成などの取り組みを経て、2006年には、水産庁の「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に選定された。トタン屋根の小屋がついに観光資源になったのである。

「番屋エコツーリズム」は、この番屋を体験型観光のシンボルにして、漁師や地域住民が体験の担い手となって村の魅力を伝えることを目指すところから生まれたコンセプトである。その後、体験型観光の推進主体であるNPO法人体験村・たのはたネットワークによって、漁師が自らの小型船で北山崎を案内する「サッパ船アドベンチャーズ」や「番屋ガイド」など、田野畑村ならではの特徴的なエコツアー・プログラムが生まれ、定着していった。



写真-1 震災前の机浜番屋群

## 4. 震災からの村の復興と番屋群の再生

東日本大震災による田野畑村の被害は甚大であった。沿岸部の漁村集落の大半が津波で流失し、机浜番屋群をはじめ、村が10年をかけて築きあげてきた番屋エコツーリズムの舞台のほとんどが失われた（写真-2）。

しかし、村の観光復興への立ち上がりは、

\*（公財）日本交通公社



写真-2 机浜番屋群のあった机浜(被災後)

岩手県内でもとりわけ早いものであった。流失したサッパ船は、震災後間もない段階でNPOのメンバーが調達に奔走し、震災から5カ月足らずでプログラムの再開を果たした(写真-3)。観光から少しでも村の復興する姿を見せたいというNPOのメンバーたちの強い気持ちが原動力となった。

「観光を地域の復興の力に」という考えは、村全体の姿勢でもあった。それは、村災害復興計画において、「集落再建・コミュニティ再生」、「福祉」、「水産業復興」とともに、「観光復興」が復興の柱の一つに据えられたことからもうかがえる。

現在、筆者も関わって策定した村の観光復興計画に基づいて、失われた机浜番屋群を再生しようとするプロジェクトが進められている。ここで簡単に、「机浜番屋群」再生の狙いを紹介しておきたい。

第一には、三陸北部沿岸漁村本来の暮らし風景の継承である。被災した三陸沿岸の多くの漁村が、防潮堤の建設や集落の高台移転などにより漁村風景の大きな変貌が避けられない中であって、後背地に集落がなく、もともと高台に生活の場があったことから防潮堤の計画もない机浜は、本来の三陸漁村の海での営みの風景を再び取り戻すことのできる希少な場になると思われる。

番屋群の再生にあたっては、かつての番屋群をできるだけ当時の姿で再生しようとしている。番屋は、もともと漁師たちが家の古材



写真-3 再開を果たした「サッパ船アドベンチャー」(田野畑村作成チラシ)

や近くの山の木を持ち寄って、「ゆいとり」という共同作業で作られてきたものである。番屋の配列も含めて、その成り立ちは極めて自然発生的なものであるだけに、その趣を新たに計画的に創り出すことは難しい。したがって、個々の番屋の建物や高さ、屋根勾配、そして並びも、可能な限り被災前の状態に近いかたちでの再生を目指すことになった(図-1)。これには、被災前の当時の番屋を地域のの人たちによって詳細に調査した記録が残っていたことが大いに役立った。



図-1 番屋群再生のイメージスケッチ

第二には、風景と切り離すことができない漁村文化の継承である。そのためには、ただ番屋を再現するだけでは意味をもたない。机浜の漁業は、簡単な漁具を使ってウニやアワビ、海藻(昆布、ワカメなど)を採取する採集漁業や養殖漁業が中心で、どちらかと言えば農業に近い漁業である。ゆえに番屋の前面に広がる南面の日当たりの良い小石の浜は、昆布などの干場(カンバ、日干し場の意)として利用され、番屋は漁具の保管や手入れに適したサイズで、内部も漁師たちによって使い勝手よく工夫がこらされていた。このように、土地や建物が実際に意味のあるかたちで使われながら継承されていくためには、漁師たち自身の理解と協力が前提である(写真-4)。番屋群の一面には、かつて机浜で行われていた塩づくりも復活させる予定である。

第三には、観光との関わりの中で、番屋に新たな価値を加えていくということである。観光は、地域を誇り、その地ならではの体験やサービスを通して付加価値をつけ、総合的な経済価値に変える地域産業といえる。漁業も、観光との関わりを通して、より相乗効果の高い「海業」へと発展させていくことが期待される。本来の海の暮らしを基本的な営み



写真-4 番屋群の再生を考える漁師との懇談会

としながら、訪れた都会の人がその風景や地域の人のふれあいから何かを感じ取ったり、多様な海の魅力にふれたりすることのできる交流の場としても活用されてほしい。

また、机浜番屋再生プロジェクトでは、計画づくりや井戸の復元などのプロセスに、都市サポーターが多数参加した。漁師たちの「結い」の力で作られてきたかつての番屋は、都市の人との「新たな結い」の関係の中で再生が進められている(写真-5)。



写真-5 都市サポーターが参加した井戸復元プロジェクト

## 5. 三陸らしい新たな漁村風景の創出を

いったん失われた漁村の暮らし風景の再生には、長い年月を必要とし、映画のセットのように簡単に創り出すことはできない。またそれは、三陸の漁村が震災前の姿に戻ることもない。

三陸沿岸の多くの被災地域の集落の再生では、安全な高台や内陸部への移転が進み、元の場所にかつてのような集落やまちが再生されることはない。紹介した田野畑村の「机浜番屋群」再生のような取り組みは極めて稀な存在といえる。

一方で、「高台に住み、海(海辺)で漁や水産加工を生業とする」形態は、今後も繰り返されるであろう津波等の自然災害を宿命とした、これからの三陸沿岸漁村の新たな暮らしスタイルの一つになっていくように思われる。

このことも含めて、これからの三陸の漁村集落やまちには、どこにもある新興住宅地とは異なって、地域の人々が愛着と誇りをもって新たな暮らしと文化が時間をかけて醸成され、再び旅人を魅了する漁村風景へと生まれ変わってくれることを願いたい。

## 引用文献

- 1) 吉村昭：三陸海岸大津波：文春文庫、65-66
- 2) 大隅一志(2012)：観光地の被害状況と復興(岩手県)－被災地の観光復興の現場から見えてきたこと－：観光研究 Vol.24 No.1, 12-21
- 3) 大隅一志(2011-2012)：研究ノート 三陸の観光復興－岩手県田野畑村の取り組み(1)～(5)：観光文化 Vol.209～213